



國家圖書館編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

2

國家圖書館出版社



國家圖書館
編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

2

國家圖書館出版社

第二冊目錄

昭和二年(一九二七)旅行日誌(第二十四期生)

原口輝雄	第三卷第三編		一
吉川義博	第三卷第四編		五三
隈部勇	第三卷第五編		一四五
西本喜興世	第三卷第六編		一七三
平野博	第四卷第一編		二二一
芹澤赳夫	第四卷第二編		三一三
井上進	第四卷第三編		四八七
飯村滿	第四卷第四編		五四七

旅行日誌

北支那
調査
班

廿四期生

原口輝雄

昭和十一年四月

東亞同文書院請查辛巳月紀

三日月

大書院
書館印

六月一日

待々々待々々大旅行出発の日也イヨイヨヤ
ツテ来タ、昨夜十二時迄ヤノ宿ニ就イテ
一寸マドロレカト思フツテ又ウ四時ゲア
ル、直カニ床ニ起キテ早速南郷ヲ起
ンキ行キ、荷物ノ事ハ萬端整工、朝食
エソコソエ、校庭ニ行キタルニ早ヤ一行六
名ノ班員皆集リ、記念撮影ヲタルニ後
直ヤ自御車ニお乗り、爆竹ノ音ト拍手
トヲ後ニ出發、大連汽船碼頭ヘ向フ、
碼頭ニ到院長、馬場、大谷ノ両教授ノ他
二三十名ノ学生一行ヲ見送ラル、
院歌、萬歳の声裡ニ出帆、時ニ午九時
ナリ、實ニ感歎ニ滿タタ瞬間ゲアツタ、

夏目漱石全集 卷五 辛巳月終

海上に極々平穩デ気分爽快ナリ。

前日カラノ疲勞ノ爲メ熟睡シテ夕方目
覚メ時ハ幾分荒レテイタ。

六月二日

青島着

曇

前日ノ晝寐ノ爲、夜中ヨリ目寐ム海ニヤ
、穩マカエナワテイタ。甲板ニ出テ、涼
ニダ甚ダ氣持カヨイ。

十二時頃青島ノ島影ヲ認メタ。午後一時
過ぎヤエハ青島港外ニ無事投錨シタ。

船上ヨリハムカニ向テ眺ムハ新緑ニ包
マシタル固々森立ノ建物ヲ隱見スル

眺ムハ実ニ續テ且タ南欧ノ風景ヲ

思ひこり遠くやり眺たり如何に文化の
避暑地たる之感ありたり上陸迄は種々
暇とり四時ありやうやう上陸した碼頭へ
時節板山東軍ノ警戒嚴重なり彼等兵
士が一般市民や碼頭苦力に對し横暴に
振舞うたに誇り顔するを見たり實に彼
等ノ無智ヲ憐れしむるに慙感あり信じて
先輩村上氏ノ斜旗に花月旅館ニ投宿
スル事ニナリタタ食後班員ト打連して
市中ヲ散策スル思フタヨリ人通り少く
又街路ノ明リモ少く寧ろ口靜カヤン所ト
思フタ只邦人、ロシア人等の力フエ、料理屋
ノ軒ヲ並べたりトトノ二ハ一瞥にたり

育三日

青島滞在

自今に限 部トハ早ク去リカ外ノ連中
カ皆寐テイノ一、時面カ経リナリ
困ワタ。朝食ヲ攝メシテ皆テ 總領事館
ヲ訪問シ 濟南行キノ事ニ就テ概ニ質問シ
タ今ノ所 濟南ハ大丈夫トノ才言ニテ
一同安心シタ。約三十分才談シテ辭シ
歸リニハ市中ノ山手ノ方ヲ見物シ乍ラ
歸リタ。青島トイフ所ハ道路ニ立派ナル割
合ニ因 靜テ住定地トシテハ適當ナル所ト
思ワタ。

午後南郷トエ人デ 縣人先輩 折田公芳
氏ヲ 正隆銀行ニ訪問シタ。半期決算ヲ
控メエテ此レサウタツ人デ スケ才暇マ

六月四日

青島滞在

シタ、夕方方々折田氏が、我々の旅館へ尋ね
テ下サワタ。ヒールヲ即馳走シテ下サワリ。
学生一同上、書院ノ事ニ就テ色々話サレタ。
七時迄ヤエト帰リシタ。班員ハ又町へ出
掛ケテ買物シタリシタ。

今朝ハ早クカツ目カサメテ、隈部ト二人テ
話シ、ンデイル内ニ他ノ者无起キテ来リ。
九時前頃カラ班員ト一緒ニ海事協会へ遊
ビ、行キ、玉突キヲナシ全敗シタ、ソレカ
ラ又下ノ海浜ニ下リテ、ホートツ食ソテ
来リタ。皆満チカ下チ上、坂ガ甚クア

洋服かびる日 帰レエナワリ。

夕方カヲ、青島在住先輩ノ歓迎會ニ行
ワリ、先輩モ二三ノ名見エテ、大イニ賑ハリ
タ、中ニモ五期生ノ小谷節夫トイフ方ハ
非常ニ面白ク人ヲアワセ、青島内ノ脚
馳走ニ舌鼓ヲ打リテ、散會シタノハ十一
時前ヲアワセ。

六月五日

青島出発

↓ 濟南へ

晴

五時半ニ起床、出発ノ準備ヲシテ停
車場ヘ向テ、昨夜ノ舍合ノ時、濟南ヘ行
際ハ上衣カケハ既ニ大テ洋服カアレハ
シテ着テ行テ探エトノ先輩ノ注意カ
アツタノヲ洋服ヲ着用ス、何トナレバ南軍

北伐ノ折板南軍ノスパイニア丁度我等
ノ旅行服ニ類似セン服ヲ着タル者カ逮捕
サレタル旨ナレバソノ節ノ注意ヲ引カザル
様ニトノ事ナリ

十時四十五分ニ發車ス。車中ハ即メノ中
東客ニ少ク割合ニ樂ナリ。汽車ノ各駅ヘノ
差着時固ニ割合ニ正確デ、汽車ノ動揺ニ
少ク思フタリ氣持カヨイ。西側ニ山東ノ
大平原ヲ眺メテ眺望頗ル雄大デアル。

途中、坊子、濰縣、張店等ニ駐附近ニ邦
人ノ住メタル見ル。汽車ヨリ見下スト。道路ハ
皆田ト田トノ間ニ水ノ流レタ路ト思ハル。低地
デアツテ、通行ハ困難ナキデアル。驢馬

東亞同文書院圖書室幸七片系

二 驛馬車ヲ引カセ行ク山東人ノ姿ハ実
 ニ悠長ナル、車中ニ、汽車ノホーイヲ相
 マニトリトメテイテ話シテ時ノ経ワシ
 忘レテイリ、又一紳士ニ、仁丹ト眼藥ノ
 効能ヲ十分ニ吹聴シテ、頗ハハク所非常ニ
 喜ニテ、殆トカイ屈スル事ニテ、午後
 九時三十分ニハ濟南ハ着イリ、濟南駅ハ
 カスカニ山東軍ノ警戒ガ嚴重ナル、
 直ニ鶴屋旅館ニ向テ、宿ノ人ハ親切ニ
 我ノ泊ル宿賃ヲウシト勉強ニテ呉レテ
 約十二時ニモ木板ノ上ヘ腰ヲ掛ケ寝ケテ
 イタリテ少シ腰カ痛い、
 十一時就寢、

六
月
廿

滑南滯在

晴

七時起床、一同領事館へ行つた。副領事
米田山氏に就き、請南以南の状況を承へるに
昨今津浦沿線に北軍の警戒最嚴重なり。又汽
車は悉く不規則となり、我々の南下する中
止せしむるに勸告せられた。

後魯太公司ニ先輩ノ小口、楠土、二氏ヲ
訪問シ、ソレカラ連レ立ワテ、京海班ノ連中
ノ泊ソケイル所へ行ワテ、彼等ニ合ワテ、小
時ニテ其處ヲ辭シ、調査資料蒐集ノ
爲メ、実業協会ニ行ワテ、夕方カラ二三
テ、清南病院見学ニ行ワテ、中ニ大キナ病
院ヲ設ル元完師ニテイル入院者ノ大部

分ハ支那人ヲ露細亞ノ負傷兵モ二三
人入ワテイタ支那人ガハ日非常ニ評判
カイトノ事ヲアル。多數邦人ノ醫者ト看
護婦カ支那人相手ニ改動シワ、アルノ見テ
實ニ愉快ヲアワタ。

晩ニハ日信洋行ノ東氏ノ招待ヲ受テ班員
一同行ワタ。丁度戦乱ノ為メ鄭州ヲ引上
ゲテ来ラレタ二三ノ先輩元一緒ニナワテ
四方山話ヲシテ九時迄ギニ宿ヘ歸ワ
タ。

六月七日

濟南滞在

曇夜雨

六時半起床

起キテ見ルト雨ガ降ワテイ

連日暑サニ苦シタラシライルノササ縣生ノ恩ヒカ

之夕、晝食后班員一同馬車にて城內見物之行
 けり、先づ最初跑突泉之行、有名なる泉、
 三伯ノ孔カク泉ノ湧キ出ヅル有様、丁度別府
 子見タ海地獄ノ湯ノ湧キ出ヅルノトヨリ似タイ
 ン、水は清うカ、附近ノ建妙ニモ種々人エノ美
 ヲ施シテ立派ナル。只乞食カタリサニ群リ
 居ニ市、見世物や露店が多ク居並ニテ、カマ
 ヒスンク叫ニ、タイノ事、其ハ実ニ不快ノ念ヲ起
 セシタ、ソレカラ豫テヨリ聴キ、千佛山ニ登ル
 山ハ割合ニ険阻ナルガ、石ノ鋪道が敷イテ
 登ルニ左程困難ヲ感心ナイ、此處ノ佛像ハ
 皆色ヲ施シテ却リテ俗惡ナル、山上ニリ有
 南ノ所ヲ見スト、實ニ大キイ所ナト思フタ。